

(1) 本校の新聞活用（NIE）の現状

本校は 8 クラス×3 学年の比較的規模の大きい都市部の伝統校である。進学率が高く、大学受験指導型の授業が展開されている。しかしながら、2018 年度は新たに「探究科」が開設され、受験を意識しながらも全ての授業が従来の講義型の座学のスタイルから脱却しつつある。全教室で電子黒板が活用されており、Wi-Fi 環境も整備され、授業で iPad やスマートフォンを用いることも珍しくない。

したがって、NIE が本校の教育活動の方向性にマッチしないということは全くない。探究的学びを進めるなかで、新聞活用は比較的取り組みやすいアイデアのうちのひとつだ。問題は、2018 年度において、NIE を組織的に導入する時間的な「隙」がほとんど残されていなかったことである。めまぐるしく変化する教育環境のなかで、一年間を通して ICT 活用と「探究」の計画、受験指導の計画が既に前年度段階でぎっしりと詰め込まれ、一日の教育（例えば SHR や始業前、放課後の時間を含んだあらゆる時間）のなかにも、NIE を組織的に入れ込む隙を見いだすことができなかった。

そうした全く時間的・人的余裕のない状況において、教員集団がどのように新聞の利点を共有し、どのようにその教育効果を生徒に提供することができるかが、本校の課題である。

(2) 実践のねらい

高大接続改革のなかで、従来型の知識中心主義だけでは受験に対応できなくなっている。新聞をもちいて、探究的な学びに結びつけ、また、社会とのつながりを意識させることで、知を生き生きとした行動的実践知につなげたい。その成果が、進路保障に結びつくことにも留意しておきたい。

(3) 研究の概要

個々の NIE の方法論の研究というよりも、いわゆる「進学校」に NIE をどのように位置づけるか、という研究である。そのなかで、2018 年度に行ったのは、(ア)新聞にふれられる工夫、(イ)探究のためのツールとしての新聞および新聞データベースの活用、(ウ)主権者教育における新聞活用、(エ)個別の授業のなかでの新聞活用の 4 つである。

(ア) 新聞にふれさせる工夫

各教室に常に新聞をおくということをしたかったのだが、諸々の事情で調整ができなかった。また、SHR の時間を利用して 30 秒プレゼンなどを継続的にやればとも考えたが、受け入れられなかった。よくある実践が、ことごとく「時間」と「空間」の壁に阻まれた。しかたなく、「時間」と「空間」の制約を受けにくい工夫のみを行った。

① 新聞閲覧コーナーの設置

新聞購読の期間を9月～12月の4ヶ月間に設定し、配達していただける全紙（8紙）を一挙に閲覧できるよう、県NIE研究会からおくっていただいた設計図をもとに閲覧台を自作。2階の渡り廊下に設置し、圧巻の新聞コーナーを演出した。終わってみれば生徒へのアナウンスが十分ではなかったと感じるが、推薦入試の時期には朝や放課後に新聞を手に行っている生徒が多くいた。

② いっしょに読もう新聞コンクールへの応募

夏期休業の課題として一年生で取り組んだ。結果として2名が入賞。一年生全員が何らかの記事を主体的に読み、意見を書く機会をつくることができたということでは、大変利便性が高い。コンクール自体の完成度も高いと感じた。



縣陵 NIE ニュースレター 8月号より

(イ) 探究のためのツールとしての新聞活用

2018年度1年生より普通科の総合の時間、探究科の探究の時間にいわゆる探究学習を行っている。探究学習推進室がデータ収集法などのレクチャーを図書館に依頼し、そのなかで新聞そのものに加え、**信毎データベース**の活用についても扱っていただいた。1年生はWi-Fiが学習に利用できるため、iPadやスマートフォンで、学校内であれば個人がいつでもアクセス可能である。ただし、実際には生徒は他のウェブサイトから情報を収集することが多く、書籍や新聞などの印刷された活字媒体に思うほどには目が行かなかったのではないかとという反省がある。



縣陵 NIE ニュースレター 1月号より

(ウ) 主権者教育における新聞活用

本来であれば全ての授業や生徒会活動が主権者教育につながるはずであるが、本校では組織的に主権者教育がはっきりとデザインされてきたわけではない。そんななか2018年度は夏に県知事選があったため、主権者・人権教育係が主体となり、3年生に対して「選挙学習」の機会を設けた。受験を控える3年生であるため、通常授業のなかに主権者教育を取り込むことができず、また、総合の時間等も進路学習を中心として計画が組まれていたため、年度がスタートしてから主権者教育の時間を取るのには困難だったが、奇跡的に1時間を確保することができた。

貴重な1時間をフルに活用するため、主権者教育係では信大の学生でつくるサークルで本校卒業生も多い「信大 STAP」のメンバーに来ていただき、7月18日(水)の信毎紙面「信毎×早大マ

ニフェスト研究所 マニフェストスイッチ 8.5 知事選」を利用した。3年生全員が7月18日の信毎統合版を購入。新聞をとおして社会とのつながりを意識し、また、卒業生がそうした社会的活動を行っていることから、受験に直接役立つ知識だけにとらわれない視野を獲得するきっかけをつくることができた。

なお、「信大 STAP」による特別授業を経て、模擬投票も行った。投票は自由投票・秘密投票で、模擬選挙管理委員を有志で募り、松本市選管より様々な物品をお借りしておこなった。この経験から主権者教育や NIE に興味を持ち、推薦入試で信大に合格した生徒もいた。

模擬投票結果は県下 6 校と連動したかたちとなり、校内だけでなく他校と社会に開かれた実践になったことも評価できる点だった。



縣陸 Human rights & Citizenship Vol.02 より

(エ) 個別の授業のなかでの新聞活用

新聞 8 紙の同時購読を機に、各教科の授業でも、できるだけ新聞を活用するよう、教職員に呼びかけた。もちろん受験指導中心体制のなかであるので、できる限りということである。家庭科の授業では、学習内容が直接新聞で扱われることもあり、多くの単元の入り口で新聞を活用した。また、国語科などでの活用率が高かったようだが、数学などでは活用しにくかったようだ。ここでは、地歴公民科の「世界史」の授業での事例を報告する。

授業実践例

個人探究的な授業展開に挿入する、メッセージ性をもった「世界史」の授業

～全体主義の危険性についてナチズムを例に～

本校 1 年生の世界史 B では、現在、生徒が授業（プレゼンテーション）を行う実践を展開している。生徒のペアがそれぞれ受け持つ教科書の範囲を設定し、クラスの前で教師になったつもりで授業を行う。生徒は担当する範囲の教科書の内容を主体的に深く理解することが求められるのみならず、限られた時間のなかでどうオーディエンスに伝えるか、その工夫についてまで探究することになる。

本時は、上記のような探究的展開の途中に、教員からのメッセージとして挿入するものである。ここでは、教科書的な歴史事実の確認そのものよりも、その確認を通して生徒が歴史を学ぶことの意義に気づき、歴史探究のあり方を見直す契機とすることが目的である。そのために、現代における社会問題、ここではとりわけナチスドイツとヒトラーに関連した話題を報じる記事から歴史をとらえ返す。

ナチスドイツあるいはヒトラーにまつわる忌々しい歴史の記憶に反して、実のところ「ナチス＝カルチャー（ナチカル）」は、人々の心をある程度魅了してきた。特に日本においては、サブ＝カルチャーの文脈では、その意図にかかわらずナチス・イメージは繰り返し登場してきたし、それがあからさまに批判されたり、批判されなかったりしてきている。

本時は、アイドルグループ「欅坂 46」の衣装がナチス親衛隊（SS）に酷似しているとして批判されたという 2016 年の新聞記事を題材とする。記事中で「サイモン・ヴィーゼンタール・センター」が指摘するように、「傷つける意図がなかったとしても、こうしたパフォーマンスは被害者の記憶をおとしめる」ことは確かであろう。問題は、歴史を踏まえないまま、ナチス・イメージをはじめとした負のイメージが悪意なく消費されることにある。

ナチスは、「合法的」に政権を掌握した。宣伝・広告を含むさまざまな大衆操作の結果、大衆が扇動された（だ

まされた」という指摘はあるが、実際には大衆はナチスに共感し、支持した。悪意の有無にかかわらず、感情的な共感に基づく政治がいかに危険であるかについて、歴史は教えてくれている。

歴史を踏まえるということは、単にナチスは「悪」だったという歴史的事実があるので、そのイメージを使うべきではない、と考えることではない。その「悪」がなぜ大衆をとらえたのかを見直し、そこから、現代のわれわれが常に「悪」にとらえられる可能性があるのだという想像力を持つことであろう。

本時は、現代における複数の新聞記事から、ナチスの歴史とその特性を考え、現代社会を生きるわれわれの指針のひとつを考えようとするものである。ひとつの記事ではなく、複数の記事を利用することで、一つの事象を多面的にとらえる。

また、本時の認識のありかた、すなわち「歴史を踏まえる」ことの重要性は、現代社会における類似の事象（例えばTV番組における顔の「黒塗り」の意味するところについての問題や、BTSが着ていたTシャツ問題の意味するところなど）についても、一般化して考えることのできるものであることを示唆する。

さらに、われわれの生活（生徒にとっては学校生活など）においてこそ、ナチスやファシズムの危険性を歴史的に踏まえるが、重要であることを留意させる。

<導入>

- ・ 前時までの学習（ナチスによる政権掌握）をスライドで確認し理解する。
- ・ 授業者の話を聞き、前時までとはコンセプトが違い、今回は、特定の歴史的事象から歴史そのものを考える時間であることを意識する。
- ・ 配布されたプリント資料①を一瞥し、新聞から考えることがテーマだと気付く。

<展開1>

- ・ 資料①を読み、ワークシートの間1・間2に各個人で答える。(5分)
- ・ 数名に指名し、解答の例を確認する。
- ・ 資料②を個人で読み、ワークシートの間3への解答を作成する。(5分)
- ・ 上の解答をグループ内で発表し、討論を行い、グループとして最善の解答を作成する。(10分)
- ・ グループの回答はミニ・ホワイトボードに書く。
- ・ 書けた班はミニ・ホワイトボードを黒板に貼る。



<展開2>

- ・ ワークシートの間3へのグループとしての解答を提示し、複数の解答から、共通認識を形成する。
- ・ 黒板上の意見の分類を見ながら、どのような立場があり得るか考える。
- ・ 補足的な発問により、それぞれの立場について理解する。



＜まとめ＞

- ・ 問4への解答をそれぞれ考え、スマートフォンを利用しClassiへ入力する。
- ・ 他者の意見をスクリーンで確認する。

＜問4への生徒の解答から＞（原文ママ）

- 実際に自身が被害を受けている、または親族で被害を受けた人がある、という立場ではなくても、「自分だったらどうだろうか。」という、ただ他人からの目線ではなく、その出来事の当事者に自分がなったらどうだろうか、という目線で考えられるようになると良いと思う。学生である私達であれ、事案を評論する評論家であれ、ただ外側からの目線で物事を考えるのは辞めた方がいい。ナチス・ドイツがどのように危険なのか、ただ一概に「戦争を起こしたりホロコーストをしたりした」という面で危険だと言うのではなく、その奥にどんな目的があって詳しくどんな事をされていたのかを考える事が重要であると言う点は忘れてはいけないだろう。歴史を踏まえるというのはただかつてあった事を学ぶことではなく、それをどう活かすかであるということを理解しておきたい。
- 当時のナチスは集団の心理を利用して国民をナチスを肯定する方向に向けていった。記事2にあるように集団に属する本人達にその意思がなくても統一感と共同体の中での自由を感じて使命感が生まれ盛り上がるので、その恐ろしさと従う快感の怖さを理解し、その上でこのデザインは世界においてどのようなイメージを持たれるか考え、アイドルの衣装のように「かわいいから」「ファンが盛り上がるから」といった理由で集団に属する人からの見られ方だけを考えるのではなく、客観的にその集団を見た時にどうなるのか考えて行動することだと思う。
- 欧米にとってナチスの歴史は集団で過激な行動をして、大量虐殺に繋がった負の歴史。絶対に繰り返さないよう、後世に伝えたいはず。日本はその思いを汲み取り、パフォーマンスに取り入れるにしても、その恐ろしさを人々に伝えるようなものにすべき。これは、日本にとって原爆を外国でパフォーマンスや商品の1部として使われたことに批判が相次いだのと同じようにナチスの問題は日本も配慮しなければいけない問題だと思う。
- 1つの集団になって偏った同じ意見を持ち、そうすると、これこそが自由なのだという感覚を持つようになるというのがナチスの危険な部分だったという事を理解し、世の中に溢れかえっている情報とその歴史をそのまま流しながら受け取るのではなく、1つ1つに関心を持って向き合って歴史を学び自分の意見をしっかり持つという行動をすることだと思う。

今回の授業実践は単発的なものになったことは残念だったが、歴史を新聞記事から考えるということは、現在の光で過去を評価し、その認識を現在へ逆照射する試みであり、多少なりとも歴史を学ぶ意義に迫ることができたのではないかと考えている。ただし、内容的に1時間では上滑りする分量だった。2時間捻出できれば、もっと深く考えることができたものと思われる。たったプラス1時間を捻出することが非常に難しいのが、中堅進学校の難しさであると再認識した。

ワークシート

1年 組 番 氏名

問1 樺坂46のナチス親衛隊(SS)風衣装についての、サイモン・ウィーゼンタール・センターの批判はどのようなものですか。記事1のなかから該当する箇所に線をひきなさい。

問2 記事1が伝えようとしている、この問題についての日本の状況と欧米の歴史意識とのギャップとはどのようなギャップですか？

問3 記事1のなかで文芸評論家の藤田直哉さんは「戦争や兵器の表現が現実の悲惨さではなく『萌え』と結びつく記号的な表現となってしまった」と問題視しているとのことですが、なぜ・どのように「問題」だといえるのでしょうか。記事2から考えたことを、論じなさい。

※個人で書けたら、グループディスカッションを行い、そのグループとしての解答を作成してください。ミニ・ホワイトボードで発表してもらいます。

問4 記事1のなかで文芸評論家の藤田直哉さんは、今回の衣装について「歴史を踏まえた形跡はない」と指摘していますが、「歴史を踏まえる」とは、この場合、ナチスの危険性をどう理解し、どのように行動することだと考えますか。問3で考えたことをふまえて、論じてください。
→Classiのアンケートに入力してください。

アイドルグループ「欅坂46」ナチス軍服酷似の衣装に批判

Simon Wiesenthal Center Urges Producer and Sony to Apologize over the use of Nazi-themed Costumes by Japanese Girls Group "Kiyakazaka46"

October 31, 2016

The Simon Wiesenthal Center expressed its disgust over the use of Nazi-themed uniforms donned by a girl's music group "Kiyakazaka46" at a recent performance in Japan. <http://www.simonwiesenthalcenter.org/press-releases/2016/10/31/simon-wiesenthal-center-urges-producer-and-sony-to-apologize-over-the-use-of-nazi-themed-costumes-by-japanese-girls-group-kiyakazaka46>



"We are calling on Sony Music and the group's producer, Yasushi Akimoto to apologize for this inappropriate and deeply offensive presentation," (Marked Safe)

「欅坂46」の衣装に関する声明を掲載したサイモン・ウィゼンタル・センターのホームページ

欧米と隔たる歴史意識

日本のサブカル「ミリタリー」は定番 戦争「萌え」と結びつき

日本のアイドルグループ「欅坂46」が着た衣装がナチス・ドイツの軍服に酷似している。と指摘され、所属レコード会社側が「認識不足だった」と謝罪する事態。アニメに表れるサブカルチャーの世界で、現実から遊離した戦争や武器があふれる日本と、欧米の歴史意識とのギャップが浮き彫りになった。

発端は10月22日に横浜市内、600万人のユダヤ人が殺害された「ホロコースト」は欧米の人たちの心に深く刻み込まれている。深い傷として刻まれたまま、1980年代になると、経済停滞を背景に極右勢力がオナチが外国人襲撃事件を繰り返す。ナチスは単なる過去の遺物ではなく、現代社会の根底に潜む深刻な問題ととらえられている。

欅坂46の黒い衣装は、そうした反ナチス感情を逆なでし、ナチス・ドイツによって約600万人のユダヤ人が殺害された「ホロコースト」を想起させるものだった。レコード会社側や総合プロデューサーは10月31日、レコード会社側や総合プロデューサーを務める秋元康氏らに謝罪要求を突き付け、「傷つける意図がなかった」として、オナチを模したフォーマンズは被害者の記憶をおとしめ

と批判した。AP通信は「西軍に比べアジアはナチスに鈍感だ」と伝えた。欅坂46は昨年8月に結成、今年4月にCDデビューし、いま最も勢いのあるアイドルグループの一つとされる。デビュー時の緑色の衣装も軍服を強く想起させるものだったが、大きな問題になることはなかった。

実は日本のアニメやゲームなどサブカルチャーの世界で少女とミリタリー(軍事)はよく見掛ける組み合わせだ。人気アニメ「ガールズ&パシフィック」は、女子高生が戦車に乗るという設定が受け、ネットゲーム「艦隊これくしょん」も、旧日本軍の艦船を擬人化した美少女キャラクターが人気だ。アニメの登場人物に扮するコスプレでもミリタリーは定番の一つで抵抗感はない。

戦争や兵器の表現が現実の悲惨さではなく、「萌え」と結びつく記号的な表現となつてしまった」と問題視するのは文芸評論家の藤田直哉さん。今回の衣装も歴史を踏まえた形跡はない。

日本のアニメやアイドルは海外でも、もはや日本文化の象徴とみなされる。藤田さんは「オナチがメインキャラクターになった今、政治性や歴史と切り離し、ただ楽しめばいい」という価値観では通用しない」と、国際感覚の必要性を指摘した。

月16日(木)

享月

日

第1期

第2期

(夕刊)

新聞定価 朝刊55円 夕刊55円 本誌定価 3,738円(税込み) 4,037円、1部売り(税込み) 150円、夕刊 50円

第3種郵便物認可



楽しそうなカッパル役に向かって「リア充、爆発しろ!」と叫ぶ甲南大の学生たち＝神戸市東灘区の甲南大学、小川智撮影(画像の一部を加工しています)

「ファシズム」学生ら体験

「ハイル、タノ!」行進 増す声量

ル、タノ!」と行進。周囲に知り合いがいなかったためか、記者の左斜め前にいた女子学生は、行進を重ねるうちに声が大きくなっていった。記者も、翌日ほど年を離れた学生たちと声をそろえて行進するうちに体がポカポカしてくるのを感じた。

2日目は、制服が指定された。「共同体の力の継続をすすため」という。記者も学生たちと同じ白シャツとジーンズで参加。冒頭、教室での行進は、明らかに前回より音量を増していた。制服の効果だろうか、アロハシャツの男子学生が、黒板の前に引きずり出されて排除される「演出」もあった。

「田野帝国」と集団の名前を決めた後、拍手で承認されたシンボルを胸に替えて、グラウンドへ出発。この日は、全員が一緒に行動するための「共通の目的」があった。キャンパス内のカッパルを糾弾するのだ。疑似カッパル3組の前で、2500人がリア充、爆発しろ!と一斉に叫ぶ。最初はカッパルの前の2組へ、授業を見物している学生たちを気にして、声は少し小さくなった。だが、女性が生徒を「リア充、爆発しろ!」の声を次第に大きくなり、カッパルは退散。追いかけるように方向転換して、大声で叫んでいる学生たちもいた。

「やってやった感が出た」排斥の気持ち実感

ドイツ現代史を研究する田野教授は年一回、こうした授業を行って今年で9回目。倫理的な問題の指摘や、「反ファシズムの授業をしないのか」という声も寄せられるが、集団心理が暴走することの怖さを「ワクチン」として体験し、「学生に免疫をつけてもらう」狙いだという。

「最初は命令でやらされていても、集団に同調すると、責任感がまわってしまふ。ファシズムは抑圧的なイメージでとらえられるが、従っている人は、むしろ自由を感じている」と教授。「その感覚を体験すれば、本当の怖さが分かる」

楽しんでいる学生たちの姿は、授業のリポートに表れている。

「グラウンドに出る前は、面白半分な雰囲気だったけれど、教室に戻る際には「やってやった」感が出ていた。」「最初は乗り気ではなかったが、ひざ枕のカッパルの前では前列に自分がいた。教室内で行動するより、外に出て他人から見られるほうがやる気が出た。」

自分と異なる人々への反発の声もあった。

「自分が従うモードに入った時に急っている人がいたら、真面目にやれよ」という気持ちになった。「制服もシンボルも身につけていないくせに集団にまぎれこんでいる人を見ると、憎しみを覚えた。規律や団結を乱す人を排斥したくなる気持ちを実感。」

「ハイトスピーチに似ているかも」と書いた学生も。中学生で経験しているはずの「制服」の効果に触れている学生も多かった。

カッパル役だった男性20は、「二斉に手を上げる時の『圧』がすごかった」と話す。女性(1)は「本当に怖かった。同じ格好で同じセリフ。集団の圧力を感じた。」「怖いよね」と共感しながら、記者は「すっかり忘れていた。自分も、その集団の中にいたことを。」

「従う快感」の怖さ知って

なぜ人は、大勢の仲間がいて、過激な言動ができてしまうのだろうか。いじめ、ハイトスピーチ、ネット上の私刑……。戦時中は、隣人同士でお互いの言動を監視し合っていた。不寛容な空気が、今の日本にも漂っていないか。その正体に少しでも近づきたいと、思い、ある大学の体験学習に参加してみた。

「ハイル、タノ(田野万歳)」「ハイル、タノ」「ハイル、タノ!」と、タツ、タツ……。学生たちと一緒に、かつてのナチスドイツ式の敬礼をしながら、笛の音に合わせて教室の床を踏みならす。

「共同体の力」を体験するための行進だという。

6月、甲南大学(神戸市)で2週にわたって行われた「ファシズムの体験学習」。田野大輔教授(歴史社会学)の特別授業だ。文学部の1、2年生を中心に約2500人が受けた。受講の拒否や、授業途中での離脱も認められている。

初日は、ファシズムの成り立ちを学ぶ。ただ、学生は発言する際はいつも敬礼をしなければならぬ。最初はだるそうに「ハイル、タノ」と小さく叫んでいた学生たちも、教授が低い声で鋭く注意すると、静まった。

知り合いと一緒に座っていた学生たちが、誕生月順に座るよう指示される。それで、また「ハイル、

(4) 研究のまとめ

(ア)新聞にふれられる工夫では、ややアナウンスの仕方に課題がのこったものの、閲覧台という物理的なもののインパクトは残すことができた。また、いっしょに読もう新聞コンクールは大変使い勝手が良いことも分かった。(イ) 探究のためのツールとしての新聞および新聞データベースの活用では、探究学習推進室との連携にやや課題が残ったが、データベースは授業で活用することがわかった。(ウ) 主権者教育における新聞活用では、継続的な計画ができなかったものの、単発であれば過密スケジュールの中であってもそれなりのインパクトを持たせることができた。(エ) 個別の授業のなかでの新聞活用でも、継続的学習につなげることに課題が残るが、単発でNIEを挿入することは十分可能である。ただし、授業者の授業計画はそれなりに洗練されたものでないと、上滑りする可能性があることに留意したい。

(5) 残された課題

2018年度はNIE計画の準備期間がなかったため、それぞれの実践が単発に終わった。もちろん単発であれば都市部大規模校でもNIE実践は十分に可能であることがわかったが、やはり継続的取り組みによって生徒の力を伸ばす実践が必要である。2019年度はそうした実践を計画し、ひとつでも実行することが最も大きな目標である。